



1、スーフと白い馬



11月16日の奈良県日中友好協会創立60記念式にモンゴル人の馬頭琴奏者を招いて余興演奏をしてもらうという。

以前、清水日中で絵本のモンゴル民話『スーフの白い馬』を出版社の了解を得て拡大コピーし「紙芝居」に仕立て、松下さんの補助で長野さんに朗読してもらい、バック音楽にモンゴル人に馬頭琴の演奏をしてもらった。

当時の絵本があるかな？と図書館の児童書コーナーを覗くと、「スーフ」「スーフ」「白い馬」「馬頭琴」など書名の付け方に少しずつの変化はあるものの、沢山なものが見つかった。英訳、韓訳、エスペラント語訳などというのものもある。

これに合わせる馬頭琴の曲は？と探すと、これも多くの人が作曲している。しかし、図書館にはなく、借用して利用することができないので、仮に音楽を自作するなら、モンゴル情景には「巴雅齡(パヤリ)」馬が走る場面には「賽馬(=競馬)」などは如何か？モンゴル民歌を応用するのもいい。

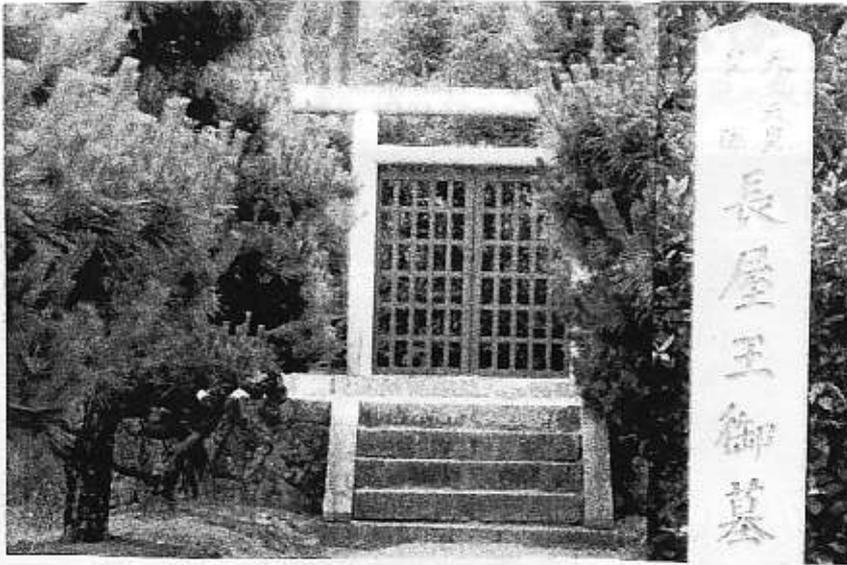
馬頭琴は難しいから、シンセサイザーで馬頭琴音色を作って弾くのも一法かな。 暉

『スーフ』だけでなく、日中友好の催しの創作が重要。多難な両国関係だけど、日中友好は絶対必要だから、式典も含めてみんなで多様にする。

互いを知るために、新しい時代の新しい友好を民間人から模索していくことが必要だと思う。

奈良の話だけではなく『どこでも』・・・





2、悲劇の王・長屋王

拙宅近くを南流する龍田川を川沿いに北上すると『平群(へぐり)町』である。弥生時代からの歴史の町で、町の中央部分に『長屋王の墓』『吉備内親王の墓』というところがあり調べてみると 長屋王(684~729)の祖父は天武天皇。父は高市皇子(高松塚古墳の主?)。母は天智天皇の娘という錚々たる血筋の生まれ。大納言・右大臣から左大臣まで上り詰めたが、「国家転覆の祈禱を行っている」と密告する者があり、藤原氏率いる軍隊が邸宅を取り巻く中、毒を飲まされて一家6人が自殺させられたという。死体は翌日には藤原氏管轄の生駒山中に埋葬されたらしいが正確な場所は不明。

密告がデタラメであることは早くから噂され、天皇の後継争いに、藤原氏の娘(光明皇后)をと願った者の仕業と判明したが、数年後、犯人と後ろ指をさされる藤原四兄弟が流行してきた天然痘に罹って次々と死亡したので「長屋王の祟り」と人々が恐れおののき、皇族たちによる謝罪のための「寺院建設ラッシュ」になっていったという。

拡大解釈すれば、東大寺も大仏も長屋王から生まれ、祟りを恐れる人達は折角作った都を捨てて、平安京に行ってしまったということになる。

平群温泉の手前にある図書館兼文化会館の館長さんにお話を伺う。「今の長屋王墓は地元歴史家の解釈では本物かどうか不明です。記録には『生駒山中東南』となっており、人の居住範囲も龍田川の流域も現在とは異なると思うからです。」とのこと。

3、✕ 静岡 ⇨ 武漢 直行便開設 ✕

ニュースによると中国東方航空が静岡⇨武漢の直行便を開設し、中国中部地区へ短時間で行けて便利になるという。私は武漢へは二度出掛けたが、一度は長沙から岳陽湖(岳陽楼・君山)まで行き、二度目は武漢大学での勉強会で黄鶴楼へも登れた。

しかし中国は広い。武漢滞在中に友人が「隣町の三国志の舞台へ行こう」と案内してくれたが、行きに半日、帰りに半日かかり、移動だけしたようなものだった。

武漢には日本人が知らない銘菜(名物料理)が沢山あり、『武昌魚』という長江で取れる魚とその調理法の話も有名。友人に「中学の教材にある」と紹介し、何度も賞味できた。

武漢直行を清水で一番喜んでいるのは趙勇娟さんかな？

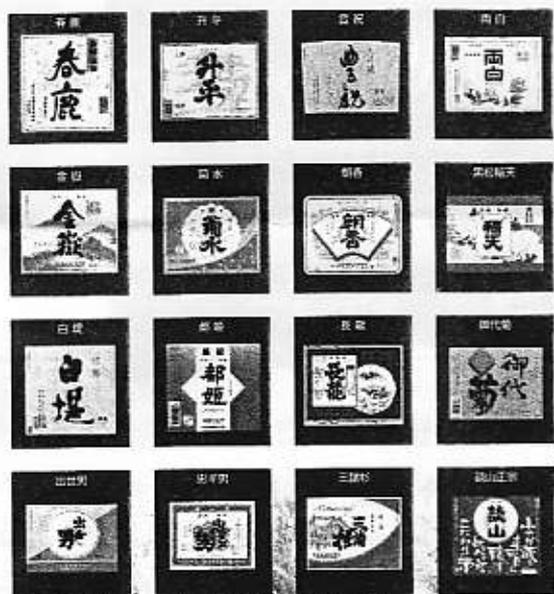
4、難波宮ってどこにあったの？

日本最大古墳(御陵)は「民のかまどは賑わいけり」の仁徳天皇(讚)陵で大阪府堺市にあることは中学の教科書にも記されていて良く知られる。仁徳帝の父が応神天皇で、御陵は大阪府羽曳野市にあって日本第二(墳丘体積は第一)だそうだ。

こうした陵墓が大阪府には沢山あって、聖徳太子の墓も大阪にある。その大阪には『難波宮』が旧都としてあり、奈良から(奈良へは)『龍田越え』で往来していたという。

へえ！？と地図や史料を借りて広げる。大阪城近くに難波宮があったという。ホンマデスカネ？ポツポツ探っていきましょう。判ったら知らせます。

大和の地酒



5、日本酒発祥の地・菩提仙川

奈良はいろんなものの発祥の地があり「日本酒の発祥の地」は奈良市東部の菩提仙川(ぼだいせんがわ)を溯ったところという。

奈良時代前からあった「山の辺の道」の中央辺の『大神神社(三輪明神)』は酒の神で「うまさげ」という言葉は「三輪」に懸かる枕詞にもなった。

山の辺の道が平城京南端に近付き、菩提仙川を東へ溯ると『正暦寺』である。

ここは、藤原時代の正暦年間に90近い堂宇が立ち並び、大寺の指導で酒造りが行われ、公認だけでもその数127カ所に及んだという酒造りの地。

江戸中期には「伏見」「灘」が銘酒の産地となるが、正暦寺は酒に関する行事が現在も行われていて、大和盆地には固有な技法を有する酒造所が残って、個性的な日本酒が生まれている。廃墟となっている旧正暦古寺を縫うように菩提仙川が流れ、清冽な水が銘酒を想起させる。車止めの先が現正暦寺で、古びた堂宇に秘仏が祀られ、鐘楼を取り巻く広大な土地が昔を物語るようである。紅葉で知られるが、若葉の候も素晴らしい。



④ 竹取の翁の名は「讃岐の造」？

奈良にはいろんなものがあることが判ってきたが、今度は竹取物語の翁の社である。何と翁は、讃岐国(香川県)の斎部氏の出身で、本名を「讃岐の造(さぬきのつくり)」といい、持統朝廷に竹細工を献上するため大和の現・広陵町に住んでいて『かぐや姫』を得たのだという。これも「ヘエ！ホンマカ？」だ。広陵町は近いので、回り道して行ってみると、なるほど「讃岐神社」というものがあった。少し寂れた小さな社である。

以前に京都西部でも「かぐや姫の里」を見かけたことがあった。美女が多いのはいいことだ。そういえば「羽衣の舞」の天女もあちこちに舞い降りるそうである。



俳句と川柳 (奈良の昨今風景：奈良新聞より)

車止め 窓を開ければ河鹿鳴く	梅雨寒や クサメで燕 追い散らし
道問えば 早苗持つ手が左指す	アジサイの色に溶けている三室戸寺
紅色の鳥居浮き出る笠置山	鮎放つ子ら 点々と 大和川
三重の塔 越えて鳴く 土蛙	香久山に尻向けて打つ 田植えかな
子造りで真っ赤に燃える金魚池	古城濠 誰も居らずに 真珠棚

業平の古寺に匂へり カキツバタ	山と古都 繋ぐ稲妻 走りたり
矢印に従い行けば 道 途絶え	安麻呂の眠れる丘の 新茶摘み
血塗られし話の多き大和原	一望で二百基あるという古墳
天平の薨を守る 夏トンボ	素人にゃ 読めん字ばかり 書道展
炎天や 五百羅漢のがまん顔	名水や 明日香地ビール 喉を越す

夏瘦せや いつも来る奴 姿なし

土用の丑の日が近付くが、今年のウナギは絶望的である。奈良の「鰻重」は懐石料理的でもともと私の好みではなく値段も高くて「お呼び」ではない。街で見かける看板も「ウナ玉」とか「ウナ牛」とかで私の味覚ではなく、「ひつまぶし」の宣伝広告もチト形が違う。「清水へ行くしかないか」といったら、烏坂の店は閉店しましたと言う。お内儀の体調が悪いと言っていたし、この高値では商売が難しいよなあ。残念！